

川上弘美「水かまきり」の教材性の検討

—「ディス・コミュニケーション」を視座として—

池田 匡史・武田 裕司

1. 問題の所在

本稿は、川上弘美「水かまきり」の教材性について検討を行うことを目的とするものである。このような現代小説と呼ばれる作品を国語科の「読むこと」の授業において扱うことの意義について鈴木愛理(2012)は以下のように述べている。

現行の学習指導要領に則して言うなら、現代という時代に表現され、受容されている言語芸術である現代小説を、この時代に生きる社会の一員として読むことの教育により、文化としての言語の継承や発展に寄与できる主体を育てることが、現代小説を同時代文学として読むことの教育で扱う意義のひとつとして考えることができる。(鈴木,2012,p.124)

国語科の読むことの授業において現代小説を扱うことに上のような意義が認められる際には、その価値をより高めるためにも現代小説の教材性の検討を行うことが重要となってくる。そのため、「水かまきり」を検討の対象とする。では、この「水かまきり」についてはどのような教材性を持つものであると考えられているのだろうか。まず、「水かまきり」の内容について確認しておきたい。

「水かまきり」は、作中人物の「春子」が「わたし」という一人称で語る形式の作品である。「ケン坊」は投手として高卒でのドラフト一位でプロ野球から指名されたが、「入団の四年後、利き腕を怪我した」ことによって自由契約となり、家に戻ってきた。ひきこもりがちになった上「かすかにしか笑わなくなってしまった」ケン坊に春子が寄り添い町を歩いていると、釣り餌屋で水かまきりを見つける。ぜんぜん動かず「死んでる」と思っていた水かまきりが生きていたという出来事を経たケン坊は、「ふわっとした大きな笑い」を久しぶりに浮かべたり、「どンドン」歩くようになったりと、ネガティブな方向からポジティブな方向へと何らかの気持ちの変化を示すようになるという展開である。

この「水かまきり」の教材性について論じたものはほとんど見られず、教師用指導書の中に述べられているのみである。その現行の教師用指導書である筑摩書房『精選現代文 B 学習指導の研究』においては、この「水かまきり」の主題を以下のようにまとめている。

人生の出発点である青年期に挫折した青年が、少女の無垢な愛に触れることで再生していく様子を、少女の視点から描いている。

ここでは二人の登場人物の想いが通い合っており、それが挫折した青年が立ち直る契機となっているとの見方が示されている。しかしながら、この二人の想いは果たして通い合っているのだろうか。この二人の登場人物同士の関係性について、「水かまきり」が所収されている川上弘美掌編小説集『ハヅキさんのこと』の巻末の解説において、翻訳家の柴田元幸は「水かまきり」について以下

のように述べている。

「わたし」から見てケン坊は「いつも大きくてあたたかい」し、彼ががらり戸を開ける音ですら、「ケン坊のところの小柄なおばさんがたてるびしゃびしゃした音よりも、よっぽどやさしく響いた」。「わたし」にとって、ケン坊は王子様なのだ。(中略：稿者)おそらくそれ以上に、そうしたケン坊の「王子様性」が喪失に基づいていることの容赦なさ。ドラフト一位指名でプロ入りしたものの腕を痛めて郷里に帰ってきた、という大きな代償があつて初めて、それは生じている。ハヅキさんの病が過去を愛おしくしているのと同じ、厳しい交換条件がここにはある。

ケン坊のプロ野球選手としての輝かしい未来が犠牲になつたうえで成り立っているのが現在の二人の関係であり、ケン坊の失つたものは、春子にとってはかり知れないものはずである。このように考えた際に、果たして二人の想いは通っていたといえるのであろうか。この問題について、川上弘美という作家による作品に対して述べられている問題から「水かまきり」の位置を更に検討する。

2. 川上弘美作品における「水かまきり」の位置づけ

川上弘美は1994年に「神様」でデビューして以降、2015年現在も作品を世に出し続けている。小説作品の中では、これまで「神様」、「離さない」、「花野」、そして「水かまきり」が国語教科書に採録されてきた。

川上弘美研究の動向について整理した原善(2010)は、教材研究としての論文では、川上弘美作品の【魅力や読み深める問題】と実際に学習者が読むということとの間に生まれる現実的な指導の困難性が示される傾向にあるとしている。原は「いずれにせよそれを〈無謀〉でなく行なえる方向を示さなければ決して〈教材研究〉たりえないはず」(原,2010,p.102)と指摘している。このように、具体的な方策としてどのように指導するかということが川上弘美作品の教材研究上の課題として残されていると言える。

では、川上弘美作品の持つ【魅力や読み深める問題】とはどのようなものなのだろうか。たとえば川上弘美という作者についての研究として、青柳悦子(2001)の指摘には注目すべきものがある。青柳は、「川上弘美の作品で描かれる状況はすべて、ひとまずデイス・コミュニケーションの事態であると言うことができる。人物は他者たちとの違和状態を生きている。」(青柳,2001,p.199)と述べている。この「デイス・コミュニケーション」という観点は「水かまきり」に適用可能なのだろうか。「デイス・コミュニケーション」という観点から「水かまきり」を読もうとするとき、先に問題の所在で論じた読まれ方と矛盾する点が生まれてくる。つまり、春子とケン坊の関係について、春子の「無垢な愛」によってケン坊が再生したと読むならば、この二人の人物のあいだではコミュニケーションが成立していることになる。この矛盾について考える必要がある。この矛盾について、まず「水かまきり」という作品が、春子が一人称で語っているものであるという点から検討する。

3. 「水かまきり」の語りの構造

先にも確認したように、川上弘美「水かまきり」は作中人物の春子が「わたし」という一人称の語りによって語られる作品である。この作品の語りの構造としては、数年前にプロ野球の球団に投

手としてケン坊が指名された数年前から、ケン坊が自由契約になり家に帰ってきたごく最近までの間の出来事が回想される場面が挿入されている点であろう。

一人称小説における回想に関しては、それは偶然ではなく意図的に選ばれているものであり、そこにはその回想を行う必然性が存在する。

今回はケン坊が川を見つめる場面において回想がなされている。つまり、ケン坊がそのような行為をするに至った経緯と、その横で黙って座っていることしかできない春子の想いが回想場面に表明されていると考えられる。ではその回想場面について考察を行う。

回想場面ではケン坊がドラフト一位としてプロの世界に入ったこと、またその四年後に利き腕の手術によって自由契約となった経緯が回想されたのちに、実家へと帰ってきたケン坊やケン坊の母の姿が回想される。特に回想後半部分の実家へとケン坊が帰ってきた場面が重要である。ケン坊が帰ってきた当初、彼のことについて時には泣きながら想いを相談するケン坊の母に「人間万事塞翁が馬」という母の姿が想起されたのちに、しばらくするとケン坊の母親があまり泣かなくなったこととケン坊がたまに外に散歩するようになったことが述べられる。ここに春子の想いを見ることができる。世間はいいいこともあれば悪いこともある、どうなるかなんてわからないものだ、という意味であるこの言葉を回想している春子は、ケン坊の状況に対する自らの無力さを悟っていると同時に、この困難な状況が時間によって解決されると考えているとみることができる。だからこそ、自ら進んでケン坊を慰めたりすることなく、ケン坊が自ら外に出てきたときのみケン坊の後を追いかけるのであろう。このことは現在視点から語られる部分においても指摘できる。春子はケン坊を慰めることをしないし、ケン坊の苦悩が見え隠れする部分においては口を閉ざす。

その回想場面の直後には現在の視点からまた語られるのであるが、その直後の内容は、春子のケン坊に対する愛情の表明である。このような想いを春子が抱いていたことは、回想場面の中の、ケン坊が扉を開ける音が春子にとってやさしく響いたという部分からも明らかであろう。

このように回想場面をとらえた際に、春子のうちには異なる二つの想いが存在することとなる。一つは、ケン坊と一緒に居られてうれしい自分。もう一つは、ケン坊の苦悩に対してどうすることもできない自分である。ケン坊は自分と歩いているこの状況を決して良いとは思っていない。だからこそ少ししか笑わないのだが、春子はそのことに対して、二つの異なる・矛盾する考えを持っているといえる。

ではこのような二つの想いを持つ春子は、なぜ最後に「なんだかかわからないけれど」嬉しくなったのだろうか。それはもちろん、ケン坊が以前のように大きく笑ったからである。そのことは自明であるのになぜ「なんだかかわからないけれど」と春子は語るのであろうか。それは、水かまきりを見たケン坊がなぜ以前のように大きく笑えるようになったのかが「なんだかかわからない」からではないだろうか。そして、春子はなぜケン坊とのすれ違いを語ったのかという問いを考えると、語っている地点の春子とケン坊との距離を想像させる。その距離が生まれる要因を探る行為として、物語内容を語っているのであろう。

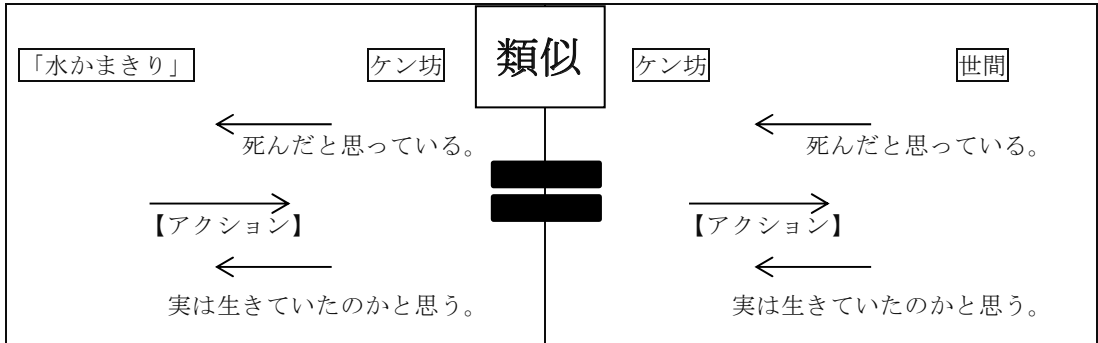
4. 声を持たない者としてのケン坊

4. 1. ケン坊の想いの変化

では、ケン坊の想いはどのようなものなのであろうか。先にも述べたように、春子が「わたし」という一人称の語りで語っているために、ケン坊は声を持たない。すなわち、この作品中においてケン坊の考えていることは明示されることはない。ただ、目に見える態度や行動から推測すること

はできる。

水かまきりのすがたに触れたことで、ケン坊の想いは変化したことが読み取れる。この変化は、わたしとケン坊から、〈生命体として〉死んだものと思われていたが実はしっかりと生きていた水かまきりという存在と、世間から〈投手として〉死んだものと思われていたケン坊という存在とがリンクしたものである。つまりケン坊は、水かまきりのすがたに自分を重ね、自分のことを「死んだもの」と見なした世間の認識を改めさせることを見定めたのであろう。以下に示したものは、その関係を図示したものである。



【図1】：水かまきりとケン坊の関係性

では、ケン坊が水かまきりと出逢う以前に悩んでいたこととは何なのか。また水かまきりと出逢った以後に見つけた生きることとはどのようなことなのか。このことを考える必要がある。一つには、プロ野球球団から自由契約の憂き目に遭い、野球人でなくなったケン坊が、一人の人間として生きていこうと決めたと解釈できるだろう。ただ、ケン坊が抱えた悩みというのが、ケン坊の母が春子の母に何かと相談する際、「話の途中で泣きだしてしまうこともあった。」とされることから、重いものであったことが読み取れることからさらなる解釈の余地を考える必要があるだろう。

4. 2. 「投げる」こと=生きること

ここで、ケン坊の悩みの内実を理解するために、「投げる」という行為について考えてみたい。「投げる」という行為は、野球人にとって必要不可欠なものである。特に投手というポジションは、「投げる」ことに特別な意味がある。ただ常に肘や肩の故障の危険性と隣り合わせの存在である。近年においても、松坂大輔やダルビッシュ有などといった日本球界史に残る大投手であっても肘の怪我をしてしまい、大きく報道されることとなった。練習や試合で多くの球数を投げ込む以上、投手はそのリスクからは逃れられない生き物なのである。「投げる」ことができないということは、投手としての「死」を意味する。投手であったケン坊も同様に「利き腕を怪我」してしまったことで「投げる」ことができなくなり、自由契約という名の「死」に繋がったとされている。

その一方で、この作品においてはケン坊が「投げる」描写が描かれている。

ケン坊はその大きな手のひらにちょうどいい大きさの石をのせて、ぐっと肩を落とした。そのまますと石を投げる。石は水面を何回も切って、向こう岸に近いところまで飛んだ。「すごいね。」わたしは言ったが、ケン坊は少しまばたきをただけで、無言のまま岸に腰をおろした。わたしもケン坊の隣に座った。ケン坊は、しばらく川の流れを見ていた。わたしもまねして川

の流れを見た。ずいぶん長い間、ケン坊は川を見ていた。

ケン坊は川をほぼ横断するほどの強さで石を投げ、「水切り」をしているのである。さらに言うならば、ケン坊が投げた石が横断した川幅は、「あと何キロか下ると海」となる河口であることが示されていることから、ある程度の広さがあることがわかる。つまりこのことは、この物語の現在では、ケン坊が再起不能レベルの怪我を負っている訳ではなく、むしろその怪我は治っていることを示しているのではないだろうか。わたしが「すごいね。」と言った後のケン坊の様子も、急に「ずいぶん長い間」、「無言」という意味深な態度を取っている。つまり、この出来事が、悩みに繋がるものであったように理解できるのである。

4. 3. ドラフト一位指名という栄光

さらに、ケン坊の悩みの内実に対して、野球という側面を別の角度から検討したい。一般的に高卒でドラフト一位指名された選手は、将来性を加味しての一位指名評価であるため、よほどの事が無い限りは短い期間でクビを切られることはない。たとえば大阪桐蔭高校時代、甲子園で最速156km/hを計測し、高卒ドラフト一位指名をされた辻内崇伸は、度重なる肘、肩の故障の影響で一軍での登板は無かったが八年間、球団に在籍した。ケン坊のようにプロ在籍四年での自由契約は、かなり早い部類である。このこともケン坊の野球への未練を暗に感じさせる部分である。プロ野球の世界から意図せず離れなければならなくなった選手からは「俺には野球しかない」という声が聞かれることもある¹。幼いころからの努力と苦勞の代償の上に手にしたドラフト一位指名であることを踏まえると、野球への未練はとて大きなものと推察される。実際に高卒ドラフト一位指名された投手においても社会人野球や独立リーグで野球を続けるという選択をした選手は多くおり²、自由契約になったからと言って野球への未練を一切残さないまま時間を過ごすということは考えづらい。つまり、ケン坊が抱えていた悩みとは、これまで全てをかけてきて、やりたいという想いを持ち続けてきた野球を取り上げられたとき、自分に残っているものなどあるのか、これからどのように生きていくことが出来るのだろうかというものと捉えられないだろうか。またそうした野球への未練ということ踏まえると、水かまきりを見た後に抱いた、その悩みの解消の術は、投手としてプロ、アマ問わず投手として再起を図ることや投げる腕を変えたり、打者転向したり、指導者を目指したりと、野球に関わることで捉えられないだろうか。水かまきりとケン坊との比較の際に導き出した、「自分のことを「死んだもの」と見なした世間の認識を改めさせる」ことの具体的な内容は、あくまで野球に関わることなのである。

¹ 「「オレには野球しかない!!」古木克明、球界再挑戦の真相を告白。」<http://number.bunshun.jp/articles/-/165021>(2015.3.31.稿者確認)

² たとえば近年では、オリックスを自由契約後独立リーグBC信濃でプレーした甲斐拓哉やロッテを自由契約後にNOMOベースボールクラブでプレーした柳田将利などがいる。

4. 4. ケン坊の決意から窺える春子とのディス・コミュニケーション

これまで検討してきた、春子とケン坊の想いを整理すると、以下の図のようになる。

春子	ケン坊
<input type="checkbox"/> +ケン坊が近くに居てくれる。 <input type="checkbox"/> -ケン坊がかすかにしか笑わない。自分にはどうすることもできない。	<input type="checkbox"/> -キャンプや遠征で家を居つかなかった時のほうが幸せ。
水かまきりとの出会い	
<input type="checkbox"/> +ケン坊がふわっと大きく笑った。 <input type="checkbox"/> -なんだかわからない。	<input type="checkbox"/> +自分は死んだという認識を変えてやろうという想い。

【図2】：春子とケン坊の想いの変化

図に示している+は、それぞれの想いのポジティブな面、-は、ネガティブな面を表している。春子は、ケン坊が近くにいてくれること自体には喜びを感じている面があるが、それはケン坊にとっての喜びには繋がらない。それは、水かまきりとの出会いの後においても同様である。春子がケン坊のふわっとした大きな笑いを見て「なんだかわからないけど」嬉しくなったとき、ケン坊は再び春子もいる地元から遠くなる場所へ歩き始めようとしているのである。

このように、春子とケン坊の想いに着目したとき、二人がすれ違って行く様が明確に現れているのである。この作品を教材として扱う際には、このようなディス・コミュニケーションに着目させたい。そもそもコミュニケーションの成立と言っても、人と人とは通じ合っているように見えて、実際には想っていることが完全に一致しているとは言えないだろう。このようなコミュニケーション観を学習者の中に耕していけることが「水かまきり」の教材的な価値と言える。

そして、このすれ違いは、物語の後の展開に対する解釈の余地に大きく影響を与える。この二人はどのようになっていくのだろうか。ケン坊が水かまきりとの出会いで見つけた道は、物語の舞台である地元では叶えることはできないだろう。再びケン坊はこの実家に居つかなくなるのが想定される。そのときに、春子はどのような態度をとることになるのか。ケン坊の幸せを心から喜ぶことができるのだろうか。これら問いを、具体的な学習活動として設定する意義を見いだすことができるのである。

5. 「水かまきり」の授業実践

5. 1. 授業実践の概要

さて、ここまで検討してきた「水かまきり」の教材性について、稿者の一人である池田による授業実践を報告することで、川上弘美作品の教材研究でも問題として挙がっていた、具体的な提案としたい。対象とした学習者は、中学二年生である。「水かまきり」は高等学校の教科書に採録されている教材であるが、学習者はこれまで文学的文章を読む際に語りを読むことで、教材となる作品を様々に読み深められることを経験してきたこともあり、大きな支障はないと考えた。また、長い文章が苦手な学習者もいるが、「水かまきり」が恋愛的要素、野球という要素が関わっていることから効果的な学びの対象になり得ると考えた。以下に実践の概要を示すこととする。

○学習者：広島大学附属東雲中学校二年生(一組 40 名、二組 40 名)

○日時：2015 年 2 月 24 日(火)～3 月 3 日(火) 計五時間

○目標：「語り」を読むことによって、「わたし」と「ケン坊」の「ディス・コミュニケーション」のすがたを読む。

○単元計画：

次	時	展開
一	1	・本文を音読する。 ・初読の感想を書く。
二	2 3 4	・「わたし」と「ケン坊」の人物像について、語りに着目しておさえる。 ・「水かまきり」による「ケン坊」の変化を確認する。 ・「ケン坊」の悩みと、その解決とは具体的にどのようなことか考えた上で、春子の恋について考える。
三	5	・「ケン坊」と春子のその後を考える。 ・初読の感想と見比べて、自らの読みの変容を確認する。

5. 2. 単元の詳細とその実際

先に示した単元計画の各時における具体的な展開について詳述していく。

第 1 時では、初読の感想を書いた。ここで設けた観点は、①「わたし」についてどう思ったか。②「ケン坊」についてどう思ったか。③二人の関係についてどう思ったか。④その他自由に思ったことを書く。という四観点である。ここまで中心的に検討してきたように、「ディス・コミュニケーション」に焦点を当てるために、当該人物像や二人の関係に焦点を当てた。

初読の内容について、特に二人の関係についての質問に対する回答の傾向は、以下の表のようになった。

両想い	26 名
片想い	22 名
幼なじみ、家族のような友達	22 名
微笑ましい	2 名
仲が悪かったのが良くなった	2 名
良いのか悪いのか微妙	1 名

学習者の反応の中では、二人の関係を「両想い」のように捉えている者が最も多かった。これは、わたしが語り出す世界の雰囲気として恋愛的な空気が醸し出されていたことによると考えられる。それは、「ピンクとかオレンジっぽい空気感がある。」と述べる学習者の存在からも窺える。また、「片想い」という、恋愛的な要素を述べている学習者の存在も、淡

い恋愛の面が前景化して捉えていることを示唆する。

第 2 時では、学習者の初読の感想を振り返った後に、それを踏まえて春子とケン坊の人物像や想いを具体的に確認していった。ただ、ケン坊の想いに関しては、「わたし」が語っているということもあり、具体的にどのようなものなのかははっきりしないということを確認した。第 3 時においては、ケン坊が水かまきりの姿に出逢い、ネガティブからポジティブな方向へ、何かしらの変化があったことを確認した上で、ケン坊と水かまきりとの共通性を確認した。その上で、ケン坊の悩みとその解決方法を具体的に検討した。その結果として、学習者の考えのバリエーションは以下のようにまとめられる。

悩み	希望
<ul style="list-style-type: none"> ・クビにされてしまった。 ・怪我をしてしまった。 ・未来への不安。 ・野球しか取り柄がない自分。 ・野球がすべてだった。 ・もう一度野球がしたい。 ・野球への未練。 	<ul style="list-style-type: none"> ・告白をする。 ・自分ができることをやる。 ・他の仕事をする ・新しい人生を考える。 ・(怪我の内容にもよるが)社会人、クラブチームでやってプロを目指す。 ・投手として再起を目指す。 ・怪我からの復帰。 ・リハビリをする。 ・サウスポーに転向する。 ・バッターに転向をする。 ・指導者としての道を探る。

これらからは、ケン坊の悩み、そして具体的な解決方法はやはり野球に関わることであるという認識になっていったと言える。一方で、一人の人間として生きるという解釈も見られる。

第4時では、これまでの学習を踏まえ、再び春子とケン坊に焦点を当て、登場人物二人の想いについて評価をした。

学習者の評価においては、二人の想いについて、「すれ違っている」とした学習者が66名、「良い感じ」とした学習者が1名、無記述が5名であった。また、これらの回答以外には、単に「すれ違っている」ことの指摘だけに留まらない視点を提示していた。「わたしはケン坊の想いに気づいているが、相手のことを優先する、もしくは自分を貫く勇気が無い。」とした学習者が3名、「ケン坊はわたしの想いに気づいているが、自分を優先する。」とした学習者が2名、「二人に叶えたいものがあるという点では似ている。」とした学習者が1名、「ケン坊が地元で指導者になるなど、地元で野球が出来る状態でなければ、幸せにはなれない。」とした学習者が1名存在した。

初読時では、二人の関係を「両思い」と読んだ学習者が最も多かったが、ここに至ると、ほぼ全ての学習者が二人の「ディス・コミュニケーション」に気づき、読みが深まっていったと出ることが出来る。

第三次では、これまで考えてきた、二人の想いを踏まえて、続き物語を書かせた。物語調で書きづらいと感じる学習者に対しては、物語後の展開の筋、プロットを書くという形でも良いこととした。ここで生まれた記述からは、多様な解釈が生み出されていることがわかる。多くは「その後」を、ケン坊のプロ復帰や春子との結婚といった“ハッピーエンド”へと進んでいったと解釈しようとしている。しかし一方で、“バッドエンド”のものもある。それらの中にも様々なバリエーションが見られる。以下では、三名の学習者による実際の記述をもとに、考察を加える。

《学習者マモルの記述》

ケン坊は投手として復活するためにリハビリを始め、春子はケン坊がプロ野球選手として復活しようとしているのを察してケン坊をとめようとするが、リハビリをしているケン坊の真剣な姿を見て諦める。そして自分で考えた結果、ケン坊を支えるトレーナーになることを決意してトレーナー

になるための勉強をしていきケン坊を支える決意をした。一方ケン坊は三年後に入団テストに合格して投手(プロ野球選手)として復活する。そしてケン坊はプロ野球の世界に戻っていき家に居なくなったが、戻ってきた時は春子が体のメンテナンスをして二人で一軍を目指していく。

マモルの記述は、春子がケン坊の復活にかける強い想いを汲み、ケン坊との関係性について、恋愛感情を諦めることで、ケン坊の生き方の邪魔になる恐れをなくそうとすると共に、それを支える存在になることが示されている。

《学習者アオイの記述》

ケン坊のケガは治っていたが、その後、一度も野球チームからの誘いは来なかった。しかし、ケン坊は泣いたりわめくことなく、あの“進藤賢太郎”ではなく“ケン坊”として日々の生活を楽しく、おだやかに過ごしている様子だった。春子は、今度こそ大切な人を守ろうと決め、スポーツ選手専門のトレーナーになった。大切な人のケガを防ぎ、その人が今度こそ幸せな日々を送れるようにするために・・・。

アオイは、マモルと同様に、春子がケン坊を諦めるという読みを提示している。ただ、ケン坊が野球の道ではなく、一人の人間として生きていったという設定にしている。それは、水かまきりの姿に対してケン坊が考えた内容についての解釈として、野球以外でも一人の人間として生きられるということに気づいたというものであったことが推察される。さらに、春子のその後の姿についても、トレーナーという生き方であることには変わりないものの、それはケン坊のための生き方ではなく、ケン坊のようにやりたかったことを諦める人が出ないようにという自分の願いや目標を叶えるための生き方という位置付けになっている。

《学習者ススムの記述》

その後二人の関係はしんてんはしなかったが春子が大人になった今でもたまにあつてしゃべる。ケン坊はプロ野球選手として野球はできなかったが社会人で野球し、30 すぎにはプロ野球関係の仕事についた。

春子は中学・高校をそつぎょうし、高校が一緒だったたかしとけっこんした。

ススムは、日頃、満足のいく学習状況とは言えないが、文章中の記述を根拠としながら、自らの野球に関する知識を基に現実味のある解釈を提示している。春子は、別の男性「たかし」と結婚をしたという設定からは、想いのすれ違いが見られる二人は恋愛関係としてうまくいかないだろうという解釈があったものと見受けられる。

そして、続きの展開を書かせた後に記述させた、初読との比較について、学習者ミズキは、以下のように自らの読みの変容を整理している。

春子はケン坊が好きなのに、ケン坊のもう一度野球をできるようにしたい、という思いを応援するのではなくて、野球はやめて、ずっと家にいてほしい、と思っている。ケン坊より、自分の幸せを考えてしまっている。ケン坊は、ただクビにされて落ち込んでいるのではなくて、野球に未練があるからこそ、今後について悩んでいる。

この他にも多くの学習者が自身の読みの深まりについて言及している。このことは、教材となった「水かまきり」の特性であると価値づけることができる。

6. 結語

以上、「水かまきり」の教材性について検討してきた。ここまで論点として据えたことを二点にまとめ、整理する。

まず一点目に、春子とケン坊との関係性についてである。先にも示したように、春子がケン坊に恋心のようなものを抱いていることは自明である。少しでもそばにいたい、そばにいられるこの現状を春子は幸せとして感じていることは疑うまでもないだろう。一方のケン坊の春子に対する想いは直接的に語られることはない。しかし春子にとって幸せなその時間はほかでもないケン坊の犠牲によって成り立っているものであった。そのことについて春子はもちろんわかっている。しかし同時にそのケン坊の悲しみや苦悩を自分を取り除くことができないことも理解していた。だからこそ時折静かな目をするケン坊の姿に何も言えないのである。「人間万事塞翁が馬」。春子はたまた外に出てくるケン坊の後を追うことによって、これらの矛盾・葛藤の中に生きていた。そんな中、ケン坊に昔のようなあの大きな笑い声が戻ってくる。ケン坊は自らの姿とみずかまきりの姿を重ね、前に進む気持ちを取り戻すきっかけを手に入れたのだ。しかし春子にはこの笑顔がなぜ戻ってきたのかよりも、笑顔が戻ってきた「事実」そのものの方が重要なのである。むしろ大きな笑顔が戻ってきた意味を理解することはできていない。ここが春子とケン坊、二人の関係性において重要な点であるといえよう。つまりケン坊が水かまきりの姿によって前に進もうとしている、その姿を眺めている春子。そこには教師用指導書において指摘されたような「少女の無垢な愛によって再生していく」という関係は見出すことができないのである。

もう一点は、このあと春子とケン坊はどのように生きていくのかということである。先ほども述べたように、春子にとってケン坊と一緒にいることのできるこの時間はケン坊の犠牲の上に成り立つものであった。ケン坊にとってこの時間は良いものであったとはいいがたいものであつたらう。そのケン坊が前に進む気持ちを取り戻した今、ケン坊はこれからどのようにして生きていこうと考えるのであろうか。そこには様々な選択肢があると考えられるが、春子にとってケン坊と会えるこの幸せな時間はこのままで続いていくことはないであろう。先に述べたようにまた野球関係の仕事に就き、家に寄り付かなくなるかもしれない。一方で、春子にとって望まれる「ケン坊と一緒にいられる」関係が何らかの形で実現されるかもしれない。「二人のこれから」を考えた際に「水かまきり」は読者に様々な解釈を生み出すものである。ここにこの作品の魅力を見ることができよう。

またそれは、実践の場を下ろした際においても大きな価値を見せた。特に訴えたいのは、通常の授業において内容理解に関して困難を抱え、学習意欲も高いとは言えない学習者も、より深く読もう、考えようとする態度を示し、ワークシートにも自分の考えを示したということである。たとえば、続き物語を書くより前の段階で、「自分なりに考えてみた！」と言いながら、前時のワークシートの裏面にびっしりと、その後の展開を書いて見せてくれるようなことがあった。またある学習者は、ドラフト一位の選手が短い期間で自由契約になることへの違和感を学級全体に訴え、ケン坊の想いに迫ろうとする姿を見せた。このような反応を示した要因の一つには、先にも述べたようにこの作品が、語られている地点以降の内容が明確にされていないという性質があるだろう。また、傾向として、男子生徒の興味が特に野球に向き、女子生徒の興味がケン坊の王子様っぽさや恋愛要素に向き、題材に抵抗がある学習者が少なかったことも挙げられる。それは、同時代性から来るリアリティーを持つこともさることながら、いかにも「子ども向け」のような教材ではないことも学習者の好感触に繋がっているのであろう。

また、初読と学習後の変容が大きく期待できるような性質を持っていることも指摘できる。つま

り、登場人物である春子とケン坊から感じ取ることができる恋愛的な側面は、単純な「想い、想われ」の関係と言えないということを学習者は見えてくるのである。

このように、「水かまきり」は「ディス・コミュニケーション」という観点が教材としての価値を生み出す作品であると言えるだろう。

7. 参考引用文献

青柳悦子(2001)「あるようなないような 気配と触覚のパラロジカル・ワールド」土田知則・青柳悦子『文学理論のプラクティス 物語・アイデンティティ・越境』新曜社,pp.198-222

井上孝雄(2014)「水かまきり」『筑摩書房版 精選現代文 B 学習指導の研究 第一部』pp.295-320

川上弘美(2009)『ハヅキさんのこと』講談社文庫

鈴木愛理(2012)「現代小説の教材価値に関する研究—川上弘美「神様」「神様 2011」を中心として—」
広島大学大学院教育学研究科『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』第 61 号,pp.123-132

原善(2010)「研究動向 川上弘美」昭和文学会『昭和文学研究』第 61 号,pp.99-102

(広島大学大学院博士課程後期 2 年)

(広島大学大学院博士課程後期 2 年)